研究区分	教員特別研究推進　教育推進

研　究 テーマ	言語内的瞬間性と感情表出：大学における英文法教育に資する日英語構文研究				
研究組織	代　表　者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	田村　敏広
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	田村　敏広

講演題目

言語内的瞬間性と感情表出の関わり

研究の目的、成果及び今後の展望

本研究は、話し手の感情表出を伴う日本語と英語の構文を分析対象とし、その感情表出が生じる言語内的なメカニズムを明らかにすることを目的とした。分析対象とした構文は、英語の Get 受動文（e.g. The grant got cancelled!)、Hot News Perfect（e.g. The train station has burned to the ground.）と日本語の瞬間構文（e.g. 来た！）である。これらの構文によって表出される話し手の感情表出は、これまで文脈依存的・言語外的な意味であると扱われ、構文の用法分析の中心に置かれることはなかった。

しかし、これら話し手の感情表出を伴う傾向の強い構文の意味性質に目を向けると、そこには類似あるいは共通するアスペクト性が存在することが明らかとなった。本研究では、これら感情表出を伴う日英語構文に共通するアスペクト性に着目し、話し手の感情表出はこのアスペクト性を基盤として発生すると仮定した。言語形式には人間がどのように出来事を捉えているのかが常に反映される。アスペクトとは、いわば、言語形式に反映された話し手の出来事の捉え方を指す。このアスペクト性を分析すると、これらの構文形式は瞬間性や完結性のアスペクト性をもつことが分かった。つまり、これらの構文では、話し手は出来事を瞬間的なもの、そしてひとまとまりのものとして捉えていることを意味する。そして、このような瞬間性と完結性こそが、話し手の出来事に対する制御不可能性を含意し、更には文脈の力を借りて、具体的なさまざまな感情として表出されることになるのだと結論づけた。

本研究は感情表出の言語内的メカニズムの解明を主な目的とする一方で、このような知見を大学の英文法教育にどのように取り入れることが可能なのかを追求することも目的とした。本研究の分析対象である話し手の感情表出は、口語的な周辺的事象として見なされ、学習項目として扱われることがほとんどない。しかし、感情表出という文脈依存的な意味と、言語内的アスペクト性の繋がりを明らかにすることで、構文自体の性質に密接に関わる意味として、英文法教育において体系的に学習されるべきものとして捉え直すことができるかもしれない。